

国際児童福祉研究会に出席して

考えたこと

平井信義

昨年の十一月二十三日から五日間、産経ホテルで第二回の国際児童福祉會議が開催された。この種の會議はわが國としてははじめてで、衝に当られたかたがたは、いろいろ御苦心の多かったことと思うが、無事終了したことは喜ばしい限りである。

私は第一部会の「子どもの発達と家庭の役割」という主題の部会に出席した。このほかに、子どもの健康を守るための部会や、精神薄弱児や肢体不自由児や、施設の子どもたちを幸福にするための部会も同時に開催されており、三十数か国からの人々が参会したと聞いている。

もとより、こうした會議では、提出された問題を深く掘り下げる討論するまでにはいたらないのが普通である。その点で不満を感じた参加者もあったことが予想されるが、むしろ提出された問題を各々の国々に

持ち帰つて、いかにそれを消化するかを考えなければならない。殊にわが國の場合には、討議の際に十分な英会話が出来る人が少ない。したがつて、どのように発言がおこなわれるかについて、企画の際にずいぶん心配されたのであるが、語学に堪能な村岡花子氏がしばしば抄訳されて日本の参会者に意味を伝えられたので、會議の内容は一応理解されたと思う。

部会の討論の中から、私は二つの問題を

ひろうことが出来た。一つは、子どもの養育・教育に当つて、家庭が果す役割と社会

が果す役割とを、どこで線を引くかという問題であり、他は家庭の中の各世代の考え方の相異についてどのような面から通路を開くことが出来るかという問題である。

子どもの養育・教育に当つて、社会と家庭とで線を引くとすればどのよう面であ

らうか。古くは、子どもの養育・教育は専ら家庭においておこなわれていた。それが文明が進むにつれて学校や幼稚園があらわれ、あるいは託児施設や養護施設などができ、そこでは母親に代つて子どもを養育する。それが國家の財源を通じて可能になったのである。殊に、社会福祉の進んでいる国々や、社会主義国家においては、公的機関において子どもを養育することに重点をおき、施設もますます完備したものになってきている。しかし、そこに、どのような新たな問題が生じたであろうか。一方、文明の進んでいない国々、特に東南アジアの国々では、子どもはなお両親によつて養育されている場合が多い。そこには不完全な養育・教育も多くあろうが、親子関係の緊密さはよく保たれていることがうかがわれる。

しかし、現代社会に生活し、現代文明の流れにしたがわなければならないとすれば、後進国といえども文明諸国が辿つたような道順を追わなければならないはずである。殊にわが国は、東南アジアの諸国に先駆けて、文明諸国その後を急追している状態にあるということが出来よう。そこには、当然

なければならないという問題が起る。会の冒頭において香港大学のライト博士が、子どもの独立を認める必要性を主張されたのは、十分意のあるところであつたと思う。この点で、アメリカは最も主張がはつきりしている国であるし、その方法についてもかなり徹底していることが考えられるが、西ドイツの代表は、アメリカの子どもは放任されていることはないかと指摘し、西ドイツの子どもはもつと家庭の中で厳格なしつけを受けている、と言わされたのは、私の滞独中にもドイツ人からしばしば聞かされたことであつた。

この点からみると、わが国のしつけは現在その主方向を失っているとみてよい。旧来は家の子として、すなわち家の跡を継ぎ、家名を擧げるためのしつけがおこなわれていた。そして戦後家族制度が崩壊すると共に、そうしたしつけが意味を失つたが、それに代つて社会人としてのしつけについてのはつきりした方向はまだ立ち立てられていない。社会人として立派な行動をとるよう望まれ、その萌芽は少しづつ見え始めたとは言え、古い頭の親たちの感覚のからは、子どもを自分の所有物として扱う傾向はなお強く残っている。その間、子ども

はどんどんと成長しているわけで、私どもの子どもの問題に取組んでいる者は、今後十一年間を費して、もう少しはつきりと国状についてもかなり徹底していることが考えられるが、西ドイツの代表は、アメリカの子どもは放任されていることはないかと指摘し、西ドイツの子どもはもつと家庭の中で厳格なしつけを受けている、と言わされたのは、私の滞独中にもドイツ人からしばしば聞かされたことであつた。

この点からみると、わが国のしつけは現在その主方向を失っているとみてよい。旧来は家の子として、すなわち家の跡を継ぎ、家名を擧げるためのしつけがおこなわれていた。そして戦後家族制度が崩壊すると共に、そうしたしつけが意味を失つたが、それに代つて社会人としてのしつけについてのはつきりした方向はまだ立ち立てられていない。社会人として立派な行動をとるよう望まれ、その萌芽は少しづつ見え始めたとは言え、古い頭の親たちの感覚のからは、子どもを自分の所有物として扱う傾向はなお強く残っている。その間、子どもはどんどんと成長しているわけで、私どもの子どもの問題に取組んでいる者は、今後十一年間を費して、もう少しはつきりと国状についてもかなり徹底していることが考えられるが、西ドイツの代表は、アメリカの子どもは放任されていることはないかと指摘し、西ドイツの子どもはもつと家庭の中で厳格なしつけを受けている、と言わされたのは、私の滞独中にもドイツ人からしばしば聞かされたことであつた。

この点からみると、わが国のしつけは現在その主方向を失っているとみてよい。旧来は家の子として、すなわち家の跡を継ぎ、家名を擧げるためのしつけがおこなわれていた。そして戦後家族制度が崩壊すると共に、そうしたしつけが意味を失つたが、それに代つて社会人としてのしつけについてのはつきりした方向はまだ立ち立てられていない。社会人として立派な行動をとるよう望まれ、その萌芽は少しづつ見え始めたとは言え、古い頭の親たちの感覚のからは、子どもを自分の所有物として扱う傾向はなお強く残っている。その間、子どもはどんどんと成長しているわけで、私どもの子どもの問題に取組んでいる者は、今後十一年間を費して、もう少しはつきりと国状についてもかなり徹底していることが考えられるが、西ドイツの代表は、アメリカの子どもは放任されていることはないかと指摘し、西ドイツの子どもはもつと家庭の中で厳格なしつけを受けている、と言わされたのは、私の滞独中にもドイツ人からしばしば聞かされたことであつた。

以上のほか、子どもの問題について社会に基いて子どもの正しいしつけについて考えをまとめるべきであることが痛感された。家族の中で、世代の相異の中でどのよう